



私はこれまでふたつの国立大学で教養や専門の英語教育を担当するとともに、外国からの留学生の受け入れ、日本人学生の海外留学を支援してきたが、ご縁があつてこの4月から名古屋経済大学国際交流センターで勤務させていただくことになった。さあ、これから北名古屋に暮らす外国人学生と、世界で活躍することを夢見る日本人学生との国際交流や英語コミュニケーション指導に取り組もうと思つていたらとたん、今回の新型コロナウイルス防止のため、

コミュニケーションの多様化に思う

PC画面にむかいながら、コミュニケーション力の養成を目指す英語授業の実践に苦しみつつも、オンライン教育から多くのことを学び、学生とのコミュニケーションのありかたについて考え直す貴重な機会となった。ここでこの3カ月を振り返つてみたい。

まず現在の大学の状況は、対面式の学びが必要ないくつかの授業を除けばほぼすべての授業がオンラインで行われている。オンライン授業は、リアルタイム双方向コミュニケーション型(Zoomなどのソフトを使つて通常の授業をオンラインで行うイメージ)から非同期オンデマンド型(学生が都合の良いとき

み方をコントロールするところできていないので、今後受講生からのフィードバックをていねいに検証してみたい。

双方向の意思伝達が必要な教育は別として、私たちの日常は、多様なオンラインソースから情報を得ることがもつと増えることは事実である。とくに自宅にいる時間が多かったこの3カ月、日本や海外のサイトからたくさん有名人の講演や対話を聞き、学ぶことがたくさんあった。

また、外出自粛期間中も遠方の会議や研究会・学会に参加できた。もしこれらの講演や会議、研究会に実際に参加していたら旅行だけでなく途方もない時間を費やしたところだろう。オンライン・コミュニケーションのありがたさも痛感した。

様相変わっても常に集中が必要

学生はほぼ登校できず、日本人学生も海外に出られないくなり、私自身もはじめてオンラインによる授業に取り組むことになった。



名古屋経済大学人間生活科学部
管理栄養学科 特任教授

中村 裕昭

に、すでにアップしてある動画や音声講義を視聴する)まで教員によりさまざまであるが、学生はいずれにしてもほぼ毎回指定される課題を提出して出席と評価を認定される。

オンライン授業のための操作は、私にとって当初とても難しく、とまどいはかりだったが、最近はやや慣れてきたという実感があつた。ただ、オンライン授業では受講生の表情から理解度や集中度を推定し、進

マルチモダル(様相の多様化)の時代に生きている。よく情報のクラウド化、AIの多方面への進出、人の都市部への移動の三つはこれからの必然的な方向であるといわれる。どのモードを使うかに関係なく、私たちはその時々集中し、自身を深化させていかねばならない。自分がきちんと目標を持ち、集中できていれば、それはそれでリアルな体験と言いつつよいのではな

なかむら・ひろあき 英語学、英語教育。京都大学大学院文学研究科博士後期課程単位取得退学。1954年生まれ。

